闘争の形態は変わっても、その階級的内容は変わらない

ブルジョア著述家の一部のもの（いまではK・カウツキーもそのなかにくわわった。彼は、たとえば 1909 年の自分のマルクス主義的立場を完全に裏切った）は、つぎのような見解を表明した。すなわち、国際カルテルは、資本の国際化のもっともきわだった現れの一つであって、資本主義のもとでの諸民族間の平和を期待する可能性をあたえるものだ、というのである。この見解は、理論的には完全に不合理であり、実践的には詭弁であり、最悪の日和見主義を不誠実にも擁護しようとする方法である。国際カルテルは、いまや資本主義的独占体がどの程度に成長したか、また資本家団体のあいだの闘争が**なんのために**行われているかを、しめしている。このあとの事情がもっとも重要であって、この事情だけが､いまおこっていることの歴史的＝経済的意義をわれわれにあきらかにするのである。というのは、闘争の**形態**は、種々な、比較的部分的で一時的な原因によって変化しうるし、またたえず変化しているが、闘争の**本質**、その階級的**内容**は、階級が存在するかぎり、まったく変化し**えない**からである。いうまでもなく、現代の経済的闘争（世界の分割）の**内容**を塗りつぶし、この闘争のあれこれの**形態**をときによって強調することは、たとえばドイツのブルジョアジーのためになる。……しかも、もちろん、ここで問題になっているのはドイツのブルジョアジーではなく、全世界のブルジョアジーである。資本家たちが世界を分割するのは、彼らの特別の悪意からではなくて、利潤を獲得するためには、集積の到達した段階のおかげて、いやおうなしにこの道に立たざるをえないからである。そのさい、資本家は世界を「資本に応じて」、「力に応じて」分割する。――商品生産と資本主義との制度のもとでは、他の分割方法はありえない。ところが、その力は経済的および政治的発展につれて変化する。いまおこっていることを理解するためには、どんな問題が力の変化によって決定されるのか、ということを知っていなければならない。だが、これらの変化が「純」経済的なものであるか、それとも経済**外**的（たとえば軍事的）なものであるかという問題は、第二義的な問題であって、資本主義の最新の時代にたいする根本的見解をすこしも変えうるものではない。資本家団体のあいだの闘争と協定の**内容**の問題を、闘争と協定の**形態**（きょうは平和的であり、あすは非平和的であり、あさってもまた非平和的である、というような）の問題にすりかえることは、詭弁家の役におちることを意味する。

最新の資本主義の時代は、われわれにつぎのことをしめしている。すなわち、資本家団体のあいだには、世界の経済的分割を**基礎として**一定の関係ができあがりつつあり、そして、これとならんで、またこれと関連して、政治的諸団体のあいだに、諸国家のあいだに、世界の領土的分割、植民地のための闘争、「経済的領土のための闘争」を基礎として、一定の関係ができあがりつつある、ということである。　　注）……は青山の略

第 22 巻 P292~293『資本主義の最高の段階としての帝国主義』

1916 年 1 月～ 6 月に執筆

ポイント

闘争の形態は、種々な、比較的部分的で一時的な原因によって変化しうるし、またたえず変化しているが、闘争の本質、その階級的内容は、階級が存在するかぎり、まったく変化しえない。　最近のアメリカ(オバマ大統領)の行動もこのような見方が必要。